



カラー作品 ■ LA MAISON SOUS LES ARBRES

パリは霧にぬれて

フェイ・ダナウェイ / フランク・ランジェラ

東和提供・フランス映画 監督ルネ・クレマン / 音楽シルベール・ペコー

TOWA

主題歌 ■ サントラ盤・東芝オアオン

ある愛のかたちに見る現代の不安

映画評論家 林 冬子

きょうももの憂い夜がまた訪れる。空は灰色に重くたれこめ、寒気が白い吐息を凍らせる。指先から心臓にむかって、肉体がだんだん冷えていくのが分るような、たまらない時間である。

ジルは身仕度をととのえて、もう半分ぬもっている下の子供パトリックをつれると、ふらふらとセーヌ河岸に降りて行った。折から老夫婦が運搬する貨物船が出発するところだ。「乗せてくださらない、あなた方が行くところまで……」ジルと子供の姿にすくおどろいた老船頭は、それでもだまって席をつくってくれた。もしかしたら、セーヌ河には、時折、ジルのような女が乗船を希望することがあるのかも知れない。

恐らく映画の冒頭シーンで、ジルを演じるフェイ・ダナウェイが、船に乗ってセーヌをゆくシーンには、こんな女の心理が先行していたにちがいない。

私たちは、白々とした風景のなかを進む。それはそれなりに美しいが、何とも形容できないほど静かで、荒涼としていて、不気味な予感につつまれたセーヌの、夕刻の冷酷な表情を、見せつけられる。そして、そのとりつくしまもない孤独な風景が、ジルのおびえ切った心を象徴していることを知るのである。

——あなたには愛するひとがいる。そのひとがごく身近かに、すぐ手のとどくところに居ながら、そのひとの心を完全につかむことができないとき、一体、あなたは どうすればいいのか。そのひとの目を見つめ、そのひとと語りあうとき、そのひとのあなたへの気持を掴んだかに感じられるのに、ふとしたそのひとの表情や、小さな行為のかけに、あなたとそのひとの心の間には、何か透明な壁がたちふさがっているような気がする。

その疑惑が、あなたをいつの間にか、口数のすくない、笑うことのない女につくりかえていく。救いよう

のない、深い心のなかの傷口は、どんどんあなたをその中に引きこみ、閉じこめてしまう。

表面は平穏にみえるジルと夫フィリップの家庭生活は、そうした日常的な、些細な人間性の崩壊からはじまって、今でははっきり、フィリップはいらいらと神経質になり、ジルはごく軽い記憶喪失気味のノイローゼ状態におこまれている。愛してくれていることは分っていても、すべてを許し切っていない夫の心理のうらをを、もちろんジルは読むことができない。そのひとはそのひとなりの、苦しみの時期があつたに違いない。そしてその苦しみの根源と、まだ完全に手を切っていないのだ。それが、妻のジルにも話せない、心のひだの部分としてフィリップの中に内在している。ジルは、置いてきぼりにされた自分の不安を、自分のなかに必死に封じこめておこうとして、ただでさえ繊細な神経をいじめつくした。愛しているひとの、求めてくる愛さえ、うけいれることができないほど、ジルは疲れ切った。

この映画は、必死に愛にしがみつこうとする女の、いじらしい愛情復活の努力を、その灰色の二年間がある朝、忽然とバラ色の人生に豹変する過程を、サスペンスのなかにえがいていく。ルネ・クレマンの演出は、産業スパイといった硬派な背景のなかで、あなたも経験するかも知れない“現代”の不気味さをみごとにとらえている。ラストがあんなに美しく結ばれるのなら、フェイ・ダナウェイのような、うつくしい苦しみを、味わってみたいと思うほどに——。

⊗



新春ロードショー ■ ヒビヤスカラ座 (591)5355

LA MAISON SOUS LES ARBRES

名匠クレマンが、鮮烈の映像に描く華麗なサスペンス！
「雨の訪問者」に続く最新作。

霧深いセーヌのほとりに住むあるアメリカ人夫妻にそっとしのびよる黒い影……作家である夫は何ものかに追われる不安におののき、妻は孤独の意識にさまよいつつ、自分を厚いカラの中にとじこめてしまうのだった。そんな折、突然、夫妻の子どもが誘拐された。

名匠ルネ・クレマンが前作「雨の訪問者」につづいてつくりあげた華麗なサスペンスの最新作。パリのアメリカ人夫妻の家庭に焦点をあてながら、夫妻の愛情をきめ細く描き、子どもの誘拐事件という、日常のなかにかくされた恐るべきワナにおびえる、現代人の不安を鮮やかに浮彫りにしている。

＊ ＊ ＊

パリの秋は華やくだあたりの風景を一変させ、もの憂いセーヌの表情がいつそう道行く人びとの心を寒々とさせる。

ジルは四才になるパトリックを連れてセーヌを行きかう砂利の貨物船に乗っていた。なぜこんなところにいるのだろう……ジルは夕闇せまる船着場にあわててとびおりた。電話を通しての夫フィリップの声はかなり激しい調子だった。

フィリップとジルにはパトリックの他に8才になるキャシーがいる。母のぐあいがこのところ思わしくないせいとか、何かと家のことによく気を配る。

フィリップは著述業として科学関係の本を書き、電子工学の方程式にとり組んでいる。二人はアメリカからパリに移ってきてもう二年になる。アメリカの大学を優秀な成績で卒業し、電子工学界で将来を約束された存在だったが、突然会社を辞め、すべての好条件をすてて、逃れるようにフランスにやってきたのだった。

ジルとフィリップの間はもう長いことうまくいってなかった。若い夫妻によくある倦怠期とも違う。互いに求め合いながら何か目に見えない壁ができていく感じなのだ。

ジルは記憶喪失気味だった。階下に住む同じアメリカ人のシンシアに指摘されてからというもの、気にすればするほど状態は悪化するばかりだ。ジルはシンシアの親切を感謝し、彼女に頼りがちとなっていた。そんなある日、子どもたちを乗せたジルの車が事故を起した。幸い、大したことはなかったが、ジルのもとに届けられた花束の送り主を知ってフィリップは顔色をかえた。

フィリップはいつの頃からか、ある組織の中で産業スパイの役割をつとめていた。自分自身の首をしめる



ような息苦しさを逃れたと思ったのだったが、組織はフィリップを見逃してはいなかったのだ。

事件はクリスマスに近いある日の夕方起きた。買物をすませたジルは二人の子どもをセーヌ河岸で見失ってしまったのである。警察は初めジルを疑った。取調べが進むにつれて、彼女が雇っていたハンセンというベビー・シッターが別人であることも判明した。フィリップはこんどの事件が、組織のしわざであることを知っていた。記憶をとり戻そうとして苦しむジルの姿を見るのがつらい……。

＊ ＊ ＊

アメリカの新鋭作家アーサー・カバノーの小説「子どもたちがいなくなった」を、クレマン自身が「リオの男」「黒衣の花嫁」などのダニエル・ブーランジェと共同で脚色。シナリオはシドニー・ブックマンとアメリカの著名な女流シナリオ・ライター、エリナー・ベリー（「泳ぐひと」）。

ヒロインは「俺たちに明日はない」「小さな巨人」の人気女優フェイ・ダナウェイ。その夫をこれもアメリカの新人、「わが愛は消え去りて」のフランク・ランジェラ。また、モーリス・ロネが特別出演している。

音楽はシャンソン歌手として世界的に有名なジルベール・ベコーが本格的に担当。ブルー・トーンのカラーによるバリ・ロケはアンドレア・ウィンディング。すばらしいドラマ効果を高めている。なお、この映画は、71年カンヌ映画祭で絶讃をあげた。

〈上映時間/1時間38分〉

スタッフ

製作……………ロベール・ドルフマン
原作……………アーサー・カバノー
脚色……………ダニエル・ブーランジェ、ルネ・クレマン
シナリオ……………シドニー・ブックマン、エリナー・ベリー
台辞……………ダニエル・ブーランジェ
監督……………ルネ・クレマン
撮影……………アンドレア・ウィンディング
美術……………ジャン・アンドレ
音楽……………ジルベール・ベコー

キャスト

ジル……………フェイ・ダナウェイ
フィリップ……………フランク・ランジェラ
シンシア……………バーバラ・パークキンズ
ベビー・シッター……………カレン・ブランゲル
シヤメーユ警部……………レーモン・ジェローム
組織の黒幕……………モーリス・ロネ

パリは霧にぬれて

カラー作品 ■ 東和提供・フランス映画

